

佐賀県ゴールキーパープログラムの成果と課題

藤 翼 (佐賀大学)

1. 目的

1998年、サッカー日本代表が初めてFIFAワールドカップに出場した際に、ゴールキーパー（以下、GK）の養成が急務であるという課題点が挙げられ、GKの練習環境の整備が進められた。2022年までの約30年の間に、多くのGKが指導を受けられるようにと、様々な施策が行われている。

その中で、佐賀県ではGK育成（普及）プロジェクト（以下、GKプログラム）が展開されており、佐賀のGKのトレーニング環境改善の一役を担おうとしている。

本研究の目的は、GKプログラムに参加する選手の練習環境を把握するとともに、GKプログラムが選手にどのように寄与しているのか評価を行い、成果と課題を抽出し、さらなる改善に向けた提言を試みることである。

2. 研究方法

- 1) 研究対象者は、GKプログラムに参加する選手（40名）とその保護者である。また、GKプログラムに詳しい専門家（2名）である。
- 2) 調査方法は、GKプログラムに参加する選手とその保護者にアンケート調査を実施した。また、GKプログラムに詳しい専門家には、インタビュー調査を行った。
- 3) 選手とその保護者へのアンケート調査は、Microsoft Formsにて集計・分析を行った。インタビュー調査は、半構造化インタビューを用いた。

3. 結果と考察

- 1) GKプログラムに参加している選手の所属チームにGKコーチがいる割合は、小学生が46%、中学生が25%、高校生が30%という結果となった。以上の結果から、所属チームにおいて、質の高い練習を行うことができていないことが示された。

- 2) 選手・保護者アンケートにおいて、「GKとして成長したか」という項目は、ほぼ全員が成長を実感しており、GKプログラムの満足度が高いことが分かった。

- 3) 保護者アンケートにおいて、否定的な意見が多かったのは、「GKプログラムの実施回数について」「移動に要する時間について」の2項目である。実施回数を増やしてほしいという意見が全体の3割を占めていた。移動に要する時間については、車での移動で30分以上かけていると回答したのが8名、1時間以上かけていると回答したのが4名であった。

- 4) インタビュー調査においては、「指導者数が多いことや若い指導者が複数いることがGKプログラムの満足度の高さに繋がっている」「より高いレベルでの指導のためにライセンス取得などの指導者養成が必要である」という意見が挙げられた。

4. 結論

本研究では、所属チームにおいて満足できる練習が出来ていない選手がGKプログラムに参加することで質の高い指導を受けようとしていることやGKプログラムが提供する指導内容は、選手・保護者共に満足度が高いことが分かった。また、開催頻度や開催場所の検討を行い、より良い形での佐賀のGKのための練習環境を提供することの必要性が示唆された。そして、よりレベルの高い指導を行うためにライセンス取得などの指導者養成を行うべきであるということが分かった。

5. 参考文献

- 1) 永野翔大, 中山雅雄, 中西康己, 會田宏「我が国のハンドボールにおける一貫指導システムの課題に関する研究」体育学研究 64, 777-795, 2019